

資料 10

国産大豆に対する業界の意向把握に係るアンケート結果

H20/11/10

国産大豆協議会資料

国産大豆に対する業界の意向把握に係るアンケート

日本豆腐協会

1. 業界における大豆の総使用量と国産大豆の需要量

平成19年 49.7万トン 輸入 約82%
国産 約18%

2. 今後3年間の国産大豆の需要見通し

③増える→ 平成19年度産対比で 2,0割程度増加

3. 業界における国産大豆の評価

① 輸入大豆と比較して優れている点

- 1) 組成的に糖分が若干多い品種があるので、味覚的に輸入大豆と比較して美味しく感じる。
- 2) 消費者が国産であると、安心、安全のイメージを持つ。
- 3) 國際的な大豆を含む穀類の暴騰により、豆腐メーカーは非常に困窮している。この状況下で国産大豆を増産することは、需給率を上げることと同時に、輸入大豆に対する相場高騰の抑止力になる。

② 劣っている点

- 1) 地域的に生産が少量のため、品質的にバラツキが多い。
- 2) 豆腐用としての適性が低く、九州フクユタカ、北陸エンレイしか適性の高い大豆はない。また、フクユタカも他の地域で栽培している大豆は、決して品質が良好なものとはいえない。
- 3) 出回り量と価格が安定しないために、業者は原料としての確信が持てない。量、価格を管理する機関が必要である。

③ 今後、改善を望む点

- 1) 供給量(出回り量)、価格、品質の安定が最大の条件である。
- 2) 国産大豆が食品用としての位置付けであるならば、大豆加工食品ごとの食品適性の高い大豆の開発が急務である。
- 3) 國際的な穀物の需給逼迫の時代に入ることが予想されならば、我が国の大豆の生産量と自給量は余りにも低すぎる、大豆の増産を要望するものであります、出回り量で30万トンは確保したい。

4. 今後、国産大豆の使用を増加させるにあたり、産地、流通、行政に望むこと。
 - 1) 大豆加工食品ごとの適性の高い大豆の品種開発が急務である。
 - 2) 国産大豆が増産されたとき、用途別の使用量を設定して、これらの生産量を実際に消化するための政策が必要になる。
 - 3) 生産から消費までの一貫した施策を考える必要がある。国産製品の販売促進を考えたとき国の資金が必要になる。生産者だけの補助だけでは、消費を含めた国産大豆の育成にはならない。
 - 4) 国は米穀だけの農政から総合的な政策の転換を図るべきである。特に国際的に変動が起きているなかで、我が国にとって、大豆、麦は重要な作物であると考えるならば。抜本的政策を思考すべき時期にきている。
 - 5) 価格安定策をとるには、少量の大豆を市場対象にした入札制度を廃止し、定額にし、管理機構を設置したらどうか。

国産大豆に対する業界の意向把握に係るアンケート

団体名：全國豆腐油揚商工組合連合会

1 業界における国産大豆の需要量(推計)

平成19年 約 50 万t	うち 輸 入 約 80 %
	国 産 約 20 %

2 今後3年間の国産大豆の需要見通し

(12,000円以上になれば)

① 減 少 → 平成19年産対比で 2 割程度減少

② これまでと変わらない (10,000円位であれば)

③ 増える → 平成19年産対比で 2 割程度増加

(7,000円～8,000円位であれば)

3 業界における国産大豆の評価

① 輸入大豆と比較して優れている点

消費者の安心感、と味

② 苦っている点

量的な確保への不安、価格の上下(2～3倍)、品質

③ 今後、改善を望む点

安定した量・品質・価格

4 今後、国産大豆の使用を増加させるにあたり、産地、流通、行政に望むこと。

産地→豆腐の加工適性に合う大豆の作付け。

新商品研究開発への協力、予算の確保

行政→ある程度の価格・数量の安定。産地、消費者、加工業者間の交流。

国産大豆に対する業界の意向把握に係るアンケート

団体名 全国納豆協同組合連合会

1 業界における国産大豆の需要量(推計)

平成19年 約 10 万t	うち 輸入 約 93~94 %
	国産 約 6~7 %

2 今後3年間の国産大豆の需要見通し

① 減少 → 平成19年産対比で 割程度減少

② これまでと変わらない

③ 増える → 平成19年産対比で 割程度増加

3 業界における国産大豆の評価

① 輸入大豆と比較して優れている点

消費者の安全安心の確保が高い

② 劣っている点

供給量が不足せば価格が高くなる

③ 今後、改善を望む点

安定供給 各種の開拓

4 今後、国産大豆の使用を増加させるにあたり、産地、流通、行政に望むこと。

流通：計画生産が出来るようにや余裕もって販売お願いしたい

行政：加工業者に対しても国産大豆使用の場合補助お願い

国産大豆に対する業界の意向把握に係るアンケート

団体名：全国調理食品工業協同組合

1 業界における国産大豆の需要量(推計)

平成19年 約	万t	うち 輸 入 約	10 %
		国 産 約	10 %

2 今後3年間の国産大豆の需要見通し

① 減 少 → 平成19年産対比で 割程度減少

② これまでと変わらない

③ 増える → 平成19年産対比で 1へ上 割程度増加

3 業界における国産大豆の評価

① 輸入大豆と比較して優れている点

- 1. 粒が大きい
- 2. 味が深い
- 3. 国産大豆

② 劣っている点

- 1. 税格が高い

③ 今後、改善を望む点

- 運賃削減による大豆の開拓
- 1. 粒をより大きく、
2. 味の引き上げ、
3. 色をより豊かく。

4 今後、国産大豆の使用を増加させるにあたり、産地、流通、行政に望むこと。

- 60kgあたりの価格を12円程度ほど安定させてほしい。

国産大豆に対する業界の意向把握に係るアンケート

20.11.5

団体名 ; 日本醤油協会

1. 業界における国産大豆の需要量（平成19年度）

醸造用脱脂加工大豆	135,000 トン	大豆換算	170,000 トン
丸大豆			35,000 トン(うち国産約 4,000 トン)

<u>大豆換算計</u>	<u>205,000 トン</u>
うち 輸入	98%
国内	2%

2. 今後3年間の国産大豆の需要見通し

平成19年対比で 微増 と思われる。

(しょうゆの出荷量は横這いないしは微減の傾向で推移すると思われるので、大豆使用量も横這いか微減と推定される。そのうち国産大豆は微増ではないかと思われる。)

3. 業界における国産大豆の評価

① 輸入大豆と比較して優れている点

しょうゆ製造用として品質は、輸入大豆と大差ない。

② 劣っている点

- ・年産ごとの供給量、産地ごとの供給が不安定である。
- ・品質について、年産、産地によりばらつきがある。
- ・購入価格が高い。

③ 今後、改善を望む点

②について改善

4. 今後、国産大豆の使用を増加させるにあたり、産地、流通、行政に望むこと

国産大豆に対する業界の意向把握に係るアンケート

団体名：全國味噌工業協同組合連合会

1 業界における国産大豆の需要量(推計)

平成19年 約 13,7万t	うち	輸入 約 94.0 %
		国産 約 6.0 %
→ (8,000t)		

（大豆需要量全額）

2 今後3年間の国産大豆の需要見通し

① 減少 → 平成19年産対比で 割程度減少

② これまでと変わらない

③ 増える → 平成19年産対比で 割程度増加

3 業界における国産大豆の評価

① 輸入大豆と比較して優れている点

味噌の原料として適性が高い。

② 弊っている点

価格が高い。
供給が不安定

③ 今後、改善を望む点

上記二点の改善。

4 今後、国産大豆の使用を増加させるにあたり、産地、流通、行政に望むこと。

1) 価格の低廉化に向けた、作付拡大のための支援策の充実、

2) 契約栽培等、供給安定化の取組の推進。

国産大豆に対する業界の意向把握に係るアンケート

団体名 : 全国きな粉工業会

1 業界における国産大豆の需要量(推計)

平成19年 約 1.8 万t	うち 輸 入 約 66%
	国 産 約 34%

2 今後3年間の国産大豆の需要見通し

① 減 少 → 平成19年産対比で 割程度減少

② これまでと変わらない

③ 増える → 平成19年産対比で / 割程度増加

3 業界における国産大豆の評価

① 輸入大豆と比較して優れている点

消費者に安心感をもたらす

② 劣っている点

甘味が中国産に比べ足りない

③ 今後、改善を望む点

生産量増加(安定供給)
国産である故の有機大豆

4 今後、国産大豆の使用を増加させるにあたり、産地、流通、行政に望むこと。

安心・安全と言ふ全ての証明が必須であり
コスト等に付けてほしい。

国産大豆に対する業界の意向把握に係るアンケート

団体名 : 全国穀物商協同組合連合会

1 業界における国産大豆の需要量(推計)

平成19年	約 95~100 万t	うち	輸入	約 82 %
			国産	約 18 %

2 今後3年間の国産大豆の需要見通し

- ① 減少 → 平成19年産対比で 割程度減少
- ② これまでと変わらない
- ◎ ③ 増える → 平成19年産対比で 3年後 3.5 割程度増加
(年率10%の伸びで試算)

3 業界における国産大豆の評価

① 輸入大豆と比較して優れている点

- ・消費者の国産物に対する信頼感(安全性・安心感)は高いので、製品の付加価値を付け易い
- ・味・風味・外観が優れている(煮豆・総菜・豆腐)
- ・大・中・小粒と識別されているので、用途適性がある

② 劣っている点

- ・安定した供給体制が確立されたとは言えず、主原料として使用することに不安が付きまとつ
- ・天候等により、生産(供給量)の波が大きく、価格変動が激しい
- ・同等級品でも、品質・選別レベル・粒形等にバラつきが見られる
- ・事前(早期)の価格が決定しづらい(入札による実勢価格反映のため)

③ 今後、改善を望む点

- ・上記②の内容を改善

4 今後、国産大豆の使用を増加させるにあたり、産地、流通、行政に望むこと。

- ・品質の安定: 国地化を進め、検査基準の平準化を容易にする(品種・粒形・等級のバラつき防止)
- ・供給体制の確立: 長期目標・最低耕作面積の設定、農家収入の安定・向上
- ・生産意欲向上・維持: 供給に対する長期展望如何では、需要も年率10%以上の伸びも可能
- ・学校給食活用: 伝統食・豆料理の普及で需要拡大
- ・食料自給率向上: 国民の理解と協力を得易い情報発信(フードマイレージ、安心・安全に対するコスト意識etc)
- ・表示の簡素化: 分かりやすさとルール順守の徹底
- ・食の安全と省資源: 消費者の安全確保と資源浪費の整合性(賞味・消費期限偏重と良品の返品・廃棄問題)
- ・安全性の確立: 栽培履歴、トレーサビリティの徹底
- ・品種改良: 気象変化・病害虫対応、多収穫、汎用性etc
- ・栽培技術力の向上